

ハイサイ沖縄

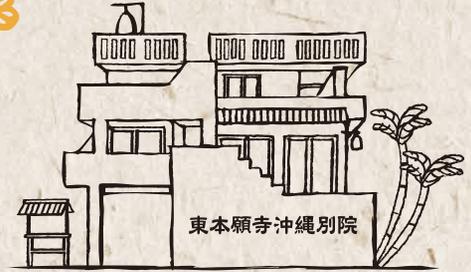
9

Sep. | 2021
沖縄開教本部通信
vol.95

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

- 目次
- 第三回 「私にとっての沖縄の学びとは」 尾畑文正
- 沖縄はいま!「米軍PFOS流しに抗議」
 - 沖縄別院、宗教法人取得
 - コラム 「一蓮托生の覚悟」 田代 賢治

真宗大谷派
東本願寺
SHINSHU OTANI



戦争賛美の傾向が強い碑文が立ち並ぶ「摩文仁の丘」中央に位置する国立墓苑

第三回「私にとっての沖縄の学びとは」

同朋大学名誉教授 尾畑文正

私

の沖縄手引書は『観光コースでない沖縄』と『戦争賛美に異議あり』である。後者は沖縄のキリスト者による各県の「慰霊塔」碑文の調査報告書である。碑文には侵略戦争を賛美し正当化するものが大多数で、戦後十年を待たずして戦前と同じ考えが表れている。この本を手には友人と一九八三年に初めて

摩文仁の「慰霊塔」の前に立った。それらの碑文に困惑する私がある日に訪ねたのがこの本にも関わる佐敷教会の平良修さんであった。先生はお留守でしたが、お連れ合いに私たちは糸数塚に案内された。

長靴で懐中電灯を頼りに洞窟内での悲惨な出来事を聞き、沖縄民衆を追い詰めた戦争に心は沈んだ。その

経験を元に、私は一九八四年に友人たちに呼びかけ「長靴と懐中電灯持参の沖縄の旅」を企画した。その最後の夜の交流会で宜野湾告白伝道所の島田善次さんが「今晩は大変気が重かった。僧侶の方は大体慰霊碑の前で読経をするだけの人だと思っていた。あなた達はそういう僧侶になつてもらいたくない」と語られた。島田さんがいう読経だけで帰って行く僧侶とはどういう問題なのだろうか。元来、経典を読誦するとは、釈迦仏、つまり目覚めた人により語り出される真実の世界、『大無量寿経』で言えば、阿弥陀仏の本願の世界に「我が身」を聞くことである。それは

本願の世界、つまり全ての命あるものを無差別平等に救いとる願いの世界から照らし出された、自己中心的な「私と私の世界」の矛盾・歪み・不正を自覚することである。それがそうならなくて、「読経だけで帰る」とは、まさに仏の教え（智慧の光）により照らし出された五濁悪世の現実を素通りにすることである。構造的差別の果てに起きた沖縄戦の悲劇に目を向けず帰らないで欲しい。その島田さんの呼びかけは今でも私の心に響いている。

後日、島田善次さんは私の雑誌『異国』に「沖縄から台湾、中国、朝鮮半島、インド、インドネシア、フィリピンが見えると同時に、その反射で沖縄から見た自分、東南アジアから見た自分、愛知や大阪で見えなかった日本の自分を見出し、日本と自分の関わりをどうすべきか、正していく場所にしてほしい」と書いてくださった。それ以降、仏教を学ぶとは社会の現実を無視して、自分の心を覗き込むことではなく、社会に関わる中で仏教に学ぶことが私の課題となった。すなわち、この世界に溢れている戦争と差別の悲鳴に「地獄・餓鬼・畜生のない国を願う」阿弥陀仏の本願の声を聞くことである。

【沖縄はいま!】 「米軍PFOS流失 に抗議」

沖縄本島中部・うるま市の米陸軍貯油施設で六月に発生した有害性が指摘されるPFOS(ピーフォス)などの有機フッ素化合物を含んだ汚染水の流出事故を受けて、「今回の事故の発生は誠に遺憾であり、断じて容認できない。本県議会は県

民の生命と安全・安心な生活環境を守る立場から嚴重に抗議し、次の事項を要求する」として、県議会は抗議決議を全会一致で可決した。その内容は、
①有機フッ素化合物を貯蔵管理する在沖米軍施設の安全管理徹底と、具体的な再発防止策の制定・公表。
②原因究明のための調査。
③事故発生の連絡体制の厳格運用と、迅速かつ正確な情報提供。

④有機フッ素化合物を使用・貯蔵・保管しないこと。
⑤有機フッ素化合物を貯蔵している施設は撤去すること。を求める事が記載されている。意見書と決議文は二〇一九年・二〇二〇年にも米普天間飛行場でPFOSなどを含む泡消火剤が流出したとも指摘している。この二つの文章のあて先は首相や外相、防衛相、在日米軍司令官などである。

沖縄別院、 宗教法人取得

二〇一〇年四月に設立された東本願寺沖縄別院が、この七月に沖縄県が認証するところの宗教法人として登記が完了しました。別院の法人化に向けて手続きを始めたのは二〇一七年、足掛け四年を経て、無事、沖縄県から法人規則の認証を得ました。代表役員には田代賢治輪番、責任役員には藤井宣行参務と組織部長が就任。総代に



ご本尊

は別院設立以来、この沖縄別院でお念仏の教えを聞き続けてこられた次の三名の方々が就任されました。安仁屋眞昭さん、糸数弘惟さん、照屋隆司さん。それぞれこれまでのハイサイ沖縄(2016.1、2015.3、2015.9)

で紹介させていただいた方々です。別院設立以来十年を経て、日本と異なる独自の歴史と文化を持つ沖縄において、本願念仏の教えを聴聞する人々が徐々に増えていきます。沖縄出身の若い僧侶も増え、別院の所在地域出身者が法務員にもなっています。法人化を一つのご縁として、ますます地域と根付き、だからこそ見えてくる沖縄の課題とも向き合うこととなります。

「一蓮托生の覚悟」

沖繩別院の宗教法人化がこのたび県に認められた。(別報左上掲)

ここ宜野湾市大山に別院が建立されてから十年余を経て、新たな歩みを踏み出すことになる。その意味は、沖縄の地域に根ざした、沖縄における教化・開教の取り組みがいよいよ本格化するということがある。卑近な例を挙げると、今まではお骨を一時預かりしていたものが、これからは別院において永代にわたって納骨し、いずれ墓地も建てられることになる。

宗門の出先機関から、県が正式に沖縄別院を一寺院として認知し、寺院活動と運営を認めたことによつて、これからは幅広く仏縁となる事業を行なうことができる。

だからといって、ドラスティックに何かが変わるというものでもないが、従前の真宗大谷派の教化・開教の拠点としての役割は開教本部が、沖縄別院は、名実ともに沖縄の人びとと共に在り続け、この地に骨を埋める「一蓮托生」の覚悟の表明でもある。

先んじて沖縄別院が法人化することによって、いづれ名護・興念寺、読谷・何我寺、南城・常照寺の三つの地域に根ざした教化拠点が続いて名告りを挙げることとなる。

親鸞聖人が教えられるお念仏の声が、この沖縄の地で再び響き渡る秋がそう遠くないことを期するばかりである。

沖繩開教本部長兼沖繩別院輪番 田代 賢治